

「江戸の判じ絵」

岩崎均史／著 小学館 2004年1月発行
2階一般開架図書（請求記号：721.8）

「判じ絵」とは、言葉を絵に置き換え、絵が表わす「音」を読み解くもの、つまり目で見ると「なぞなぞ」のようなものです。例えば、この本の表紙には、ガマ蛙がお茶をたてている絵が描かれています。絵の意味するところは、「茶をたてるガマ」から「ちゃ・がま(茶釜)」です。このように絵から言葉を読み解いていきます。ここでは江戸時代の庶民に親しまれた「もの尽くし判じ物(絵)」の作品が中心に紹介されています。入門編「いろは」から始まり「地名」「江戸庶民のくらし」「草木」など自然のもの、「人名・曲名」など、そして総仕上げに「長文読解」まであります。

判じ絵を解くのも面白く、まさに著者が述べているように江戸人との知恵比べ。現在では使われなくなった物や人名の絵では悩みますが、江戸人のユーモアに触れることができます。また絵そのものも楽しめ、絵から当時の人々の文化などが垣間見られて興味は尽きません。「しゃれ」「だじゃれ」が現在にも息づいていることを感じさせられます。

余談ですが、「蟻が10匹〜!」と言っていたことを「判じ絵」を眺めながらふと思い出しました。(ご想像のとおりです…)

「隊商(ハウフ童話全集 1)」

ウィルヘルム＝ハウフ／作 塩谷太郎／訳 偕成社 1977年7月発行
1階子ども読書室（請求記号：94/ハウ）

砂漠を行く「隊商」の団に、一人の男が馬を飛ばしてきて加わり、休憩地に着くたびに、一人ずつ何か話をしようという事になります。そこで、「コウノトリになったカリフの話」「ゆうれい船の話」「切られた手の話」などが順に語られるのですが、物語の最後に、それらの話と後から加わった男の素性につながり、謎が解き明かされるという仕組みになっています。

私が中学生のとき、家の近くの公共図書館に「少年少女学研文庫」のシリーズがあり、その中の「隊商」(塩谷太郎訳)を、たまたま手に取って読みました。そこには「アラビアンナイト」のようなエキゾチックな世界が広がり、とても面白く、続けて同じ著者の「アレクサンドリア物語」も一気に読みました。残念ながら、当館にはこの学研版の二冊は所蔵していませんが、「冷たい心臓 ―ハウフ童話集」(乾侑美子訳 福音館書店)の中には「隊商」「アレクサンドリアの長老とその奴隷たち」「シュペッサルトの森の宿屋」が入っており、こちらもおすすめです。

著者のハウフは1802年、ドイツのシュトゥットガルト生まれ。25才の誕生日を目前にして亡くなるという短い生涯でした。

「えんの松原」

伊藤遊／作 太田大八／画 福音館書店 2001年5月発行
1階子ども読書室（請求記号：913／イト）

怨霊が跳梁する平安時代。両親を喪った音羽丸（おとわまる）は、男子禁制の温明殿（うんめいでん）で女童に身をやつし「音羽」と名乗り、伴内侍（ばんのないし）に仕えることになった。

ある日の夕刻、三種の神器の一つ神鏡を祀る賢所（かしこどころ）に忍び込んだ少年を捕らえたが、それは、東宮（皇太子のこと）憲平（のりひら）親王その人だった。

藤原氏の権力伸張のため男子としての誕生を期待された憲平は、外祖父右大臣に政敵として追い落とされ憤死した藤原元方といわれる怨霊のたたりにおびえる日々を送っていた。二人は意気投合し、音羽丸は憲平が見たという少女の姿をした怨霊の正体をつきとめようとする。

平安京創建時から内裏の禁域として残され鬼が棲むと怖れられる「えんの松原」に、偶然足を踏み入れた音羽丸はそこに巣くうまがまがしい鳥の姿にその手がかりをつかむ。

「怨霊」は時に王朝人の精神を支配したが、彼らは「怨霊」に向き合うことで、それを生み出す人間の業と欲を見つめていたと言えるのではないか。

音羽丸は語る。「だれも怨霊のことなんか思い出しもしないし、いるとさえ思わない……。忘れてしまうんだ、悲しい思いをしたまま死んでしまった人間のことなんか。それはもしかすると、今よりずっと恐ろしい世の中なのかもしれないぞ」。

音羽丸のこの言葉は、作者から私たち現代人への問いかけであろう。